

活動報告

「武蔵野の自然と成蹊の学び」ESD 成蹊フォーラム 2018 開催報告

財城 真寿美 (成蹊大学経済学部)

藤原 均 (成蹊大学理工学部)

I 開催概要

成蹊学園では、2018年4月に成蹊学園サステナビリティ教育研究センター(以下、ESDセンター)が開設され、小学校から中学・高等学校、大学までの連携によって持続可能な発展のため

の教育(ESD)が学園ぐるみで進められている。ESD成蹊フォーラムは、センター開設前の2016年から毎年開催されており、成蹊学園におけるESD活動に関する取り組みの報告や講演などを実施してきた。3回目となったESD成蹊フォーラム2018は、ESDセンター開設記念式典も兼ねて、2018年4月1日に開催された。成蹊桜祭の開催日ということもあり、来場者は各校の在校生・在学生とその父母、卒業生、本学(学園)教職員などの学園関係者、そして学外からの来訪者や関連学会の関係者と多様で、約150名を数えた。広報用ポスターは図1、プログラムとタイムテーブルは表1のとおりである。第1部では「サステナビリティ教育研究センター開設記念式典」を実施し、第2部は「持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び」として、各校からのESDに関連した活動の紹介があった。そして第3部は、国立極地研究所長の中村卓司氏による「持続可能な社会実現に向けた南極・北極の観測研究の意義」と題した特別講演であった。



図1 ESD成蹊フォーラム2018のポスター

背景画像には、中村春二が描いた「八年前の成蹊実務学校」を用いた。

II 第1部「サステナビリティ教育研究センター開設記念式典」の概要

第1部はESDセンター開設を記念して、はじめに亀嶋庸一学園長から開設の挨拶があった。続いて、池上敦子ESDセンター長から、センター設置の趣旨説明があり、世界的に持続可能な社会の担い手を育む教育が必要とされていること、また成蹊学園では体験型・観察型の教育を長きにわ

表1 ESD 成蹊フォーラム 2018「武蔵野の自然と成蹊の学び」 進行表

時刻	テーマ	所属	氏名
【第1部】サステナビリティ教育研究センター開設記念式典 (13:00～13:30)			
13:00	サステナビリティ教育研究センター開設のごあいさつ	学園長	亀嶋 庸一
13:05	センター設置の趣旨説明	ESDセンター所長	池上 敦子
13:10	持続可能な開発のための教育 (ESD) の更なる推進に向けて	立教大学 ESD 研究所長	阿部 治
13:15	川端文部科学省国際統括官 (日本ユネスコ国内委員会事務総長) からの祝辞の紹介		
13:20	ESDセンターロゴマーク、キャラクター採用作品の表彰		
【第2部】持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び (13:30～14:20)			
13:30	小学校・こみち科の学び	小学校 こみち科 教諭	鈴木 宏明
13:40	2017年度 中学二年生 夏の学校活動報告	中学校生徒	雨宮 嘉香
13:50	持続可能社会の実現——国際交流の観点から考える——	高等学校生徒 Seikei International Alliance	
14:00	成蹊大学学生ボランティア本部 Uni. の活動紹介	学生ボランティア本部 Uni.	徳田 雅信
14:10	けやき循環プロジェクトで中高大そして地域とつながる ——ケヤキ並木を次の100年へ——	企画運営部	長橋 典子
【第3部 (特別講演)】持続可能な社会実現に向けた南極・北極の観測研究の意義 (14:30～15:30)			
14:30	持続可能な社会実現に向けた南極・北極の観測研究の意義	国立極地研究所長	中村 卓司
15:10	質疑応答		
15:30	閉会の辞	ESDセンター副所長	小田 宏信

司会進行：池村 祐美 (株式会社 太陽社)

たり実践してきたことなどを挙げ、今後はESDセンターが、これまで成蹊学園が蓄積してきた教育資源を、学校間で連携して維持・活性化させ、ESD教育として明示していくことを目指しているとの説明があった。次に、阿部治立教大学ESD研究所長より「持続可能な開発のための教育 (ESD) の更なる推進に向けて」として、持続可能な社会の実現には人づくり＝教育が重要であり、その教育がESDセンター開設を機に一層活性化することを望むとのコメントがあった。そして、川端文部科学省国際統括官 (日本ユネスコ国内委員会事務総長) からの祝辞が披露された。第1部の最後には、ESDセンターのロゴマークとキャラクターの採用作品が紹介され、最優秀賞および優秀賞を受賞した成蹊小学校の生徒らが表彰された。

III 第2部「持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び」の概要

第2部では、はじめに、成蹊小学校こみち科の鈴木宏明教諭に、こみち科での「栽培学習」と「環境教育」の活動について報告いただいた。「栽培学習」では、学年ごとに様々な作物を栽培し、土作りから収穫、調理まで行っている様子を、また「環境教育」としてエコバックを作成した際の

生き生きと活動する生徒の様子を、多くの写真を用いて紹介いただいた。次に、成蹊中学校の雨宮嘉香さんによる中学2年生の夏の学校での活動報告があった。2泊3日のキャンプでの野外調理やチームビルディング、ネイチャーゲームを通じて、自然に触れながら多くの学びを得たことや仲間と協力して一つの目的を成し遂げる達成感を感じたことなど、参加者ならではの臨場感のある報告であった。3番目の登壇は、成蹊高校の留学生支援グループ Seikei International Alliance を代表して岩田昂大さんと石橋侑子さんに、国際交流活動について報告いただいた。留学生が日本での生活に早く順応できるようサポートすることや、成蹊生が留学や異文化に興味を持ち多様な考え方ができるようなイベントを企画するなど、高校生主体で行われてきた活動が紹介された。そして、若い世代の国際交流や相互理解が、貧困や環境問題などを解決し、持続可能な社会の実現につながっていくのではないかと提言で締めくくった。4番目は、成蹊大学学生ボランティア本部 Uni. の環境チームリーダー徳田雅信さんが登壇した。Uni. の環境チームでは、公園や緑地、海岸などでの清掃活動、学内のグリーンカーテンの整備などの活動を行っているほか、ボランティア活動を通じ

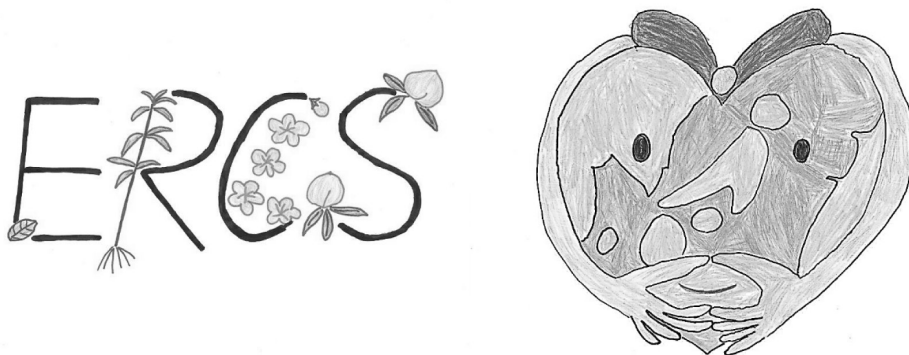


図2 ESDセンターのロゴマークおよびキャラクターの最優秀作品

左:ロゴマークの最優秀作品(成蹊小学校 塚田紀行さん), 右:キャラクターの最優秀作品(成蹊小学校 内川美温さん).

て、他の大学やNPO団体と交流を進めているとの紹介があった。第2部最後の報告は、「けやき循環プロジェクトで小中高大そして地域とつながる一ケヤキ並木を次の100年へ」と題して、企画運営部の長橋典子主査による報告があった。成蹊学園とケヤキ並木の歴史、またケヤキの樹齢が100年を越えて、落ち葉の処理や枝の落下などの課題があることが紹介された。また、その課題を各校そして地域と協働で解決していくことを目指して、落ち葉を使った堆肥作りやウッドプランターの整備など、様々な垣根を越えたESD活動を行ってきたとの報告があった。

IV 第3部「持続可能な社会実現に向けた南極・北極の観測研究の意義」の概要

第3部は、中村卓司国立極地研究所所長による「持続可能な社会実現に向けた南極・北極の観測研究の意義」と題した特別講演であった。ESDセンターの開設趣旨の1つとして、持続可能な社会の実現に向けて、成蹊学園でのホンモノに触れる環境教育のさらなる充実が挙げられる。南極・北極を主なフィールドとしてグローバルに地球環境研究を展開している国立極地研究所の取り組みは、地球規模の視点で私たちの身の回りの自然環境を見つめなおすきっかけを与えてくれるものと思われた。講演は、(1)なぜ南極・北極の観測研究を進めるのか、(2)国立極地研究所の紹介、(3)南極・北極観測の紹介、といった内容で、小学生、

中・高校生、大学生、教職員など様々な参加者に分かりやすくお話いただいた。その講演内容の一部を以下に紹介する。

なぜ、南極・北極の観測研究を継続的に進めるのか？

二酸化炭素(CO₂)の増加に伴うと考えられる地球温暖化が指摘されている。この30年余りの二酸化炭素の増加傾向は、南極や北極での観測からも明らかである。植物の活動が活発になる夏には、光合成により大気中の二酸化炭素が多く吸収される。陸地の多い北半球ではこういった植物の影響が強く現れるため、北極での二酸化炭素の季節変動は南極に比べて大きく現れる傾向がある。一方、特定の地域の影響を受けない二酸化炭素の増加傾向(経年変化)などの地球規模の環境変動を見るのには、南極は適した場所と言うことが出来る。地球温暖化の影響は、北極域で顕著に現れることが分かってきた。世界的な気温分布では、北極域で増大傾向が強く見られるほか、1980年代の平均的な北極海の海水分布と比べて2012年のそれは著しく減少していた。南極の氷床は、北極ほどには減少していないものの、地表を覆う氷の約9割を占めており、もしもこの氷床が解けた場合、海水準を60メートル上昇させると言われている。これらのことから、地球規模の環境変動を理解するうえで、南極、北極の両方において観測研究を継続的に



図3 ESD 成蹊フォーラム 2018の様子

実施することは極めて大切なことがわかるかと思う。南極や北極のアイスコアを調べることにより、(数十万年前から現在に至る)過去の気候変動の様子を知ることが出来る。過去や現在の地

球環境変動を知ることは、地球環境変動の高精度な将来予測につながることであり、未来の持続可能な社会に向けての環境理解において極めて重要なことである。